
彼らの心と冬の空

玖月あじさい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らの心と冬の空

【Nコード】

N9006X

【作者名】

玖月あじさい

【あらすじ】

彼氏と喧嘩した。些細なことのはずだったのに、どうしようもなく溝ができてしまった。ねえ、どうしたらいいの？

彼らの心と冬の空

「お前さあ、何で俺のこと避けてるわけ？ 他に好きな人でもできたのか？」

そう聞かれた。

確かに亜紀は空に隠し事はしていた、その後ろめたさはあったがしかし、亜紀は見るからに不機嫌に当たるような言い方はないと思う、と考えた。

だから。

「うるさいなあ……、避けてないよ。……ベタベタしすぎじゃない？」

少し虫の居所が悪かった、イライラしていた。それで思わず口に出してしまったのだが、言うてから、あ、と亜紀は後悔した。言っちゃった、どうしよう。謝れば許してくれるかな、と空の顔色を窺う。

——きっと怒るだろうな……。怒ったら、謝ろう。

亜紀はそう決断した。

けれど。

「あ、そう」

それだけ言っ、それきり空は黙ったままだった。

——空君と喧嘩、した。

喧嘩自体は何回かした。亜紀と空が付きあって間もないころは、よく亜紀が口をとがらせて不機嫌そうに呟き、そして空は見るからに怒った感じで言葉をぶつけていたものだ。しかし今回は違う。

「空君と喧嘩ですか？」

「うん……、でもさ、いつもと違う感じするの」

「違う感じ？」

放課後。亜紀の通う繚高校では長休み明けの数日間、昼までで終わる。亜紀は本来ならば部活に励むのだが、今日は空とのすれ違いがあったため部活は自主的に休むことにしたようだ。

そして今は、美術室にお邪魔して智希が絵を描いているのを眺めている最中だ。ついでに空との一部始終を愚痴る。……最も、どちらがメインなのかは分からないが。

「怒るだろうなって、思ったの。ほら、空君って自分の思ってることとかすぐ出すでしょ、だから怒ってくれるかなって思ったの。でもそうじゃなくて、あ、そう。だけでね？ 違うよ、そんなの……」
「確か一週間ぐらい口きいてくれてないでしょ？ ……本気で怒っているのかもね」

智希は亜紀の方を見ずに言う。制服の上からエプロンを付けて鉛筆を動かしている彼女は美術部員である。

「謝った方がいいよね……？」

きうつ、と赤い膝かけを握りしめる亜紀。手の中で、白と黒と緑の線が交差し、乱れ、丸まっている。智樹は溜息をつくと言った。

「亜紀がそう思うなら、そうすれば？」

右手に持った筆を器用に扱いながら、智希は続ける。

「私からしてみれば、あんたらカップルはとつと言葉にした方がいいタイプなの。そうしないと亜紀はいつまでも言いださないし、空は感情に振り回されて暴走する傾向あるし。冷静に勇気を持ってちゃんとした言葉にしなさい」

A四の紙の上に風景が乗せられていく。大きな空と天に腕を伸ばす少女の絵。綺麗だけど、どこか寂しくて悲しい感じがする、そう亜紀は感じた。

シン、と静まりかえる美術室。と、そこに。

ぐううううう……………。

「……え」

「あっちゃああ……、やっちゃった。ねえ亜紀、お昼にしようか」
智希が笑った。

二つの机を合わせて、二人は昼食をその上に乗せる。

「え……、亜紀なにその組み合わせ？」

「へ、変かな……？」

亜紀の目の前にはコンビニの袋が置いてあり、そしてそのビニールの中に見えるのはサクサクパイチョコ味（紙箱）とチキ、だけそれだけだ。

「おかしとチキンオンリー……？」

「だって、この前空君が、おいしいから、食べてみろって……」

亜紀の声はだんだん小さくなって、最後には囁く程度になってしまった。そんな様子を見て溜息をつく智希。

「な、なんで溜息……？」

「いやいや、思ったよりも黄色信号かもしれないなあ、と」

首を振り、肉団子を突き刺した箸を亜紀の方へ向ける。行儀悪いよ、なんて亜紀はその先から逃れるように頭を傾ける。

「とりあえず、食べよ？」

「あたしはもう食べちゃってるけど」

そう言って智希は肉団子にかぶりついた。

「あ」

「ん？ どうしたの亜紀？」

「見てこれ……、油でべっちゃべちゃ」

しかめつらで亜紀がサクサクパイの紙箱をつまみあげる。窓から差し込む太陽の下で見ると、表面がてかてかしているのが分かる。

きつと今、亜紀の指の腹は大変滑りやすく、気持ちの悪いことになっているだろう。

「あー、しちきだね。包装が紙だから油が染みだしちゃって、それでベターッ」と

「うう、何このベタベタ本当気持ち悪いよ……」

この段階で油を拭いてもどうにもならない、と亜紀は脂ぎった指のまま昼食を開始する。まずはメインディッシュから、とピリピリゆつくりしちきの包装をちぎっていく。……仕舞には面倒になって一気に引きちぎったが。

「いただきまーす」

前歯で一口分を噛み切り、そのままもきゅもきゅと噛む、噛む。

「……………」

「どう？ 空君おすすめのしちきは？」

「うーん……、ちよっと油っぽい、かな」

「そっ……か」

ちよっと喋りづらい雰囲気になる。

——あんなにおいしそうだったのに。

以前、二人で模試を受けに行って、昼食を食べるときに空がしちきを食べていたのだ。

「それ、ローソンのだよね。おいしい？」

「え、亜紀お前食べたことねーの？ マジ？ ちよ、駄目だって！ しちきは一度ぐらい食べとけ！」

「じゃあ一口」

「やだ。これは俺の」

「……ケチ」

ぷすつ、と頬を膨らませる。そこを空につつかれ、亜紀の頬のふくらみはしぼむ。

「一人占めしたいほどおいしいの？」

「おー、そうだなあ。肉自体がうまくて、噛むとちよっとピリッとするんだ。だがそれがたまらん！ モフモフの力リ力リでさあ、食べ終わると自然にまた食べてえ！ って思っんだな、これが！」

「わ、や、空君、声、大きい！」

あまりの熱を入れたしチキ語りはつい大声になってしまい、同じ教室の他の受験生たちの視線を集めることとなってしまった。慌てて両手を振り、静止させようとするが一向に空のしチキ語りは止まろうとしない。ますます視線を集め、一人亜紀だけが顔を恥ずかしさに染めるのであり、そしてそんな中に考えるのだ。

空君がこんなに熱く語るんだもの、きつとおいしさに違いない。

——それがこの様だ。

彼氏が好きだから私も好き。そんなことは全くもってないのだ。相手は自分ではないし、自分は相手ではないし。

口の中も、外も油がついている。親指で拭いても付いてくる。あまりで私たちの関係みたい、なんて思うだけなんとも詩的で中学生みたいだったので、亜紀はウェットティッシュで指を綺麗に拭くと、サクサクパイの箱を開けることにする。

サクサクパイチョコ味は、亜紀を甘やかしてくれる。

だから、一口一口を丁寧に味わう。

サクサク、サクサクと一口パイを味わっている最中に、ブーツ、と机の上でけたたましい振動音がした。亜紀の携帯がチカチカと光っている。

誰からだろうか、と上体を伸ばして携帯をとる。

『四時に、駅前のローソンに』

そんなメールの着信合図だった。差出人は空で、普段なら使うはずの絵文字も顔文字もない無機質なメール。あまりの変わりようをまざまざと見せつけられているようで、亜紀はグツと涙をこらえた。

——今日は、特別な日、なのに……。

今日と言う特別な日を、亜紀は手帳にピンクのペンでマークしていた。何よりも大事な日で、空に笑顔になってもらおうと思っていた。

た。けれど――

「どうしたの？」

「空君が、四時に駅前のローソンに来てって……」

「ふうん……、今一時だからあと三時間もあるじゃん。どうするの？」

「え、と……ここにいていいかなあ。六時から塾あって、宿題やらないといけないから……」

「いいよ。どうせ今日は他の美術部員も来ないって言うてたし」

そういうと、智希はまた水彩画の続きに入る。紙の中で一番広い面積を占める空を塗るために、青と白の絵具をパレットに出し、筆で混ぜる。色々なところから色を採り、紙の上に載せていく。二つの色から、様々な青が載せられていく。

綺麗な空。

紙面の青空はどうしようもなく、亜紀の彼氏を思い出させる。

――空君は本当に空みたいだね。

そう言ったこともあったかな。なんて亜紀は回顧する。付き合い始めて一週間目ぐらいの帰り道に、すがすがしい秋晴れのときにそう言ったら、空は、そうか？ 名前に性格がくつついたのかな？と笑っていた。

亜紀が窓の外を見ると、雪がちらついていた。

「空君……」

ローソンの壁にもたれかかるようにして、空は立っていた。亜紀とは違い、私服で、この寒いのにマフラーもしていない。亜紀が近づいていくと、それに気付いた空はゆっくりと顔を上げ、イヤフォンを外した。

「よう、亜紀」

「一週間ぶり、かな」

「そうだな。ずっと電話してなかったし、昨日今日と一緒に登校も

してなかったしな」

こっち来れば？ と空が手招きをするので、亜紀は隣に立つ。ちようど屋根の下なので、傘を閉じた。

「すげえな、雪」

「そうだね、三時ぐらいから降り始めたのにもうつすら積ってる」
空が勢いを付けて右脚を蹴りあげると、雪と水滴が近くの車に当たった。

雪はしんと降り続いている。

亜紀はポケットの中に手をつ突っ込む。寒さでかじかむ指先を、力イロが温めてくれる。

「あの、さ……」

黙って立っているだけが怖くて、亜紀は話しかけた。

「しちキ、食べた」

「ああ、そうなのか。うまかったろ？」

「あ——」

言葉に詰まった。本心を伝えるべきか、嘘を言うべきか。おいしかったよ、まずかったよ。両方違う気がする。

「……………油っぽかった」

「……………そうか」

明らかに空は落胆していた。どうしたらいいのか分からず、ただ亜紀は自分の食べた時のことを話した。

美術室で智希と一緒にご飯を食べたこと。サクサクパイの紙箱に油がくつついたこと。その油はしちキだったこと。とそこで、おい待てよ、と空が話の腰を折る。

「ローソンの店員は、お早めにお食べください、とか言うぜ？」

「え？ 言わなかったよ？」

「店員誰だった？」

「おばちゃん」

「そりゃ駄目だ、若い男の人じゃねえーと言ってくれねえ。おばちゃんなんてのは他の客とすぐ喋ってレジを止めるからな」

あ、ちよつと缶コーヒー飲むわ、と空は上着の中からコーヒーを取り出す。どうやら亜紀が来るまでの間、それをカイロ代わりに待っていたようだ。ぷしっ、と音がする。少しずつ、少しずつ飲んでいるようで何も音はしない。それとも音は、雪に全て飲みこまれてしまったのだろうか？

「え、とそれからね」

沈黙が降り積もるのが怖くて、絞り出すようにまた昼食のときのことを話し始める。しちきを食べたこと。手が油っぽくなったこと。食べた感想。とか。とか。

一方的に話す亜紀。空は缶コーヒーをちびちびと飲み続けていて、相槌一つつたない。次第に落ちていく話のペース。そして最後には、重い、沈黙。

「――」

「……………」

二人して、雪が降るのを見るだけ。

黙って白を見ていると、カランと乾いた音がした。

缶と缶がぶつかる音。右手をまっすぐ伸ばして、ゴミ箱に投下。

何を？

「なあ、亜紀」

そして空は。

「別れよっか」

雪はミゾレに変わっていた。

空は亜紀に背を向けた。けれど立ち去ろうとはせず、黙って、う

つむいて、立っていた。

そんな背中にそっと近寄る。

亜紀よりも随分と高かったはずなのに、どうしてか今は小さく見えた。

ミゾレの降る空は、灰色の雲に覆われている。亜紀は、どこまでも澄んだ空が好きなのに、雲に覆われている。

綺麗な青が、いい。

亜紀は空の首にマフラーを置いた。

青い、マフラー。

空に秘密で、選んだ。絶対にばれないように、最近はやや最低限しか会わなくして、言葉も慎重に選んで。何より、空を驚かせたかったから。

——今日は君の誕生日。

亜紀は静かに後ずさると、空に背中を向けた。

背中の方から声がした。

「しちきは、バンドと一緒にがうめえんだよ」

冬の、話。

彼らの心と冬の空（後書き）

どうも玖月です。

今回のこれは”ローソン小説”

ローソンを使えば何でもアリということで（公式企画）
書かせていただいたものです。

先に言っておきますが、リチキへの愛はありますよ！

この次にはメイキングをつっこむ予定です。

ω・ノシ。では

はうとぅーらいと(前書き)

How to write つまりはメイキングです。

小説ではございません。

興味のある方のみどうぞ。

はうとうーらいと

嫌な予感しかしないと思ったら戻りましょう。この先メイキングです。

はい、玖月あじさいです。そんなこんなでメイキングです。
今回はこちらの小説ー。ローソン×pixivの「彼らの心と冬の空」です。

このシリーズの一話目として載っている奴ですね。色々ネタバレしかないのでそちらを読んでいない場合は読んでいただければ幸いです。

ちなみに途中、玖月の他のオリジナル小説を引き合いに出していたりします。だからと言って、他のを読む必要はありません↑
↑

●土台作り

ちょっとどうでもいいことなのですが。

玖月は話を作ることは一種の「城」とかを作るようなものなんじゃないかなー、と思っています。

読み手は全員、書き手の城に迷い込んだアリスなんですよー。

閑話休題。

さて、土台です。

自分の今までの経験の地面に、この話のための土台を置きます。
参加した企画は「ローソン小説」。これが今回の土台の主成分となります。

。ローソンが出てくること。

これが最低限の条件です。これで土台は終わり。

●大黒柱

城に大黒柱つてあるの？ 知らないですけどね。
話の大黒柱を作ります。で、作り方。

「なにかを思いつく」

例えば、。ブリの。崎駿監督はテーマの絵を描くそうです。そんな感じに「これをかこう」という柱を立てます。

「深刻なキセキ」なら黒いPC画面に大量の文字が出てくること。
これ、実際に体験したことです。本気でビビりました……。

なんでもいいのです。台詞でも風景でも人でも表情でもなんでも。
彼らの心と冬の空でも体験談が元です。Lチキとパイの実買つて袋に入れてたら、Lチキの油でパイの実の箱がビチョビチョになったぜ というのがキツカケ。

玖月はこの部分だけを大量に集めたメモがあります。「へろべろ」
って書いたメモなんかも。何だそれ。

●イメージ図

大まかに決める段階です。ここで話の方向性を決めます。基本的に柱に引つ張られます。

＊絶対に玖月は細かく決めません！

とりあえず、油でベトベトって気持ち悪かったんでそれと関連させて、ベトベトした生ぬるい関係とかどうかなあ、と。

で、そもそもしちキ買ったきっかけが、弟からの熱烈な勧めだったのじゃあ、男子！ 恋愛！

単純な決め方ですねw

さて、話を単純に決めます。一言で表せる話。↑これ肝要です！

「喧嘩した恋人が、仲直りする話」

あい、決定です。

●素材決め

キャラです！ 玖月が一番ここに力を入れます。キャラ小説は褒め言葉！

今回はまずしちキ買う子の設定。女の子の子！

この段階で思い付いている要素を並べたてます。

- ・女子（彼氏持ち）
- ・サプライズ好き
- ・昼食をよくコンビニで買う
- ・高校生

思い付いた順です。

で、次は彼氏。

- ・ちよつとやきもち焼き
- ・なんとなく茶髪
- ・ぶっきらぼうな口調

さて、雛型は出来たのであとは適当に頭の中で遊ばせましょう。
そのうちにキャラが出来てくるはずです。

キャラが暴走してくれないーって時は、崖から突き落とすなり、
友達と喧嘩させるなりしましょう。

遊ばせた結果←

- ・季節は冬
- ・ローソンは駅の近く
- ・女の子は電車通学、男の子は自転車通学
- ・女の子には親友がいる
- ・その親友は美術部

考えても使わない設定もあります。例えば女の子の昼食を〜とか、
通学方法とか。それでもまあ、キャラを作る上では細くなるので
頭の隅に置いておきます。ちなみに長いシリーズにならないかぎり
キャラクター一人一人の設定表は作りません。

●設計図

いわゆるプロット段階。ここで細かく決めます。話よりもキャラ
の性格を優先させます。ここでさっき脳内で遊ばせた結果が出てき
ます。遊ばせ足らないと、動いてくれなかったり、矛盾が生まれて
きます。

起 朝。Ｌチキ購入。登校中に彼氏と喧嘩。

「ベタベタしすぎなんじゃないの？」

「あ、そう」

承 無視。互いに無干渉。二人とも募るイライラ。

「何か声をかけてきてもいいだろう？」

「信じらんない、何で……？」

転 昼休み。親友と美術室で昼ごはん。

ベタベタ油。

電話。

結 仲直り。

「しちきはバンズと一緒にがうめーんだよ！」

プロットだけ見ると本気で訳が分からないっ！

自分にだけ分かるメモをとるタイプだからでしょうね。ちなみにサイレントシザーなんかはプロットなしで書きました。

●建設

実際に書いていきます。

今回はローソンなのでちまちまと小ネタを入れました。大体経験談。

とは言え、玖月は感情こめて適当にキーボード叩くタイプ。その場のノリでキャラに感情移入しながら書くタイプなので、かなり変わりました。というか結末全く違います。

仲直りしたのか分からないです。もしかしたら別れたかもしれないません。

確かこういうラストを読者自身に任せるっていうのは、名前があったはずだけど……。忘れてしまいました。なんて残念な記憶力。まあこれゆえに、以前の小説ってどう書いたの？ って聞かれても答えられないですよ……。

とにかく！ はい、これで小説の完成！

お疲れ様です。少し長かったですー。

他に質問や希望など有ればお気軽にどうぞ。誠心誠意答えます。

それと！ 今まで読む専門でこれから書いてみよう！ と言う人へ。

絶対に、まずはどんなに短くても一つの話を仕上げてください。

長編だと挫折しがちです。まずはどれだけボロボロでも、一つ書きあげてみてください。

一歩踏み出さないと、いつまでたっても進まないじゃないですか？
ではでは、これにて。

はうとうーらいと（後書き）

というわけでメイキング。いかがだったでしょうか？

p i x i vの方での企画に乗った感じなのですが。

読み返してみると何だかここだと広告チックな感じもしますが。

直接リンク飛ばせないのは辛いかなー。

もしかしたらできるのかなー？

まあ兎にも角にもメイキングでした。

興味を持った書き手さんは、ぜひやってみてはいかがでしょうーか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9006x/>

彼らの心と冬の空

2011年11月24日10時47分発行